

# 本を選ぶ

NO.436 2021年(令和3年)9月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

- <ろん・ぼわん>被災地に本を届けた10年
- 選書の法則:S.R. ランガナタンからの187のメッセージ(17)
- 帰ってきた図書館員(62)
- 「今しかできないことを」—フランス旅行②
- 図書館を離れて(第54回)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

## 被災地に本を届けた10年

●丹治 史彦●

2011年3月、東北沿岸部のあまりの惨状にいても立っても居られず、しかし自分が被災地に向いたところで何かの役に立てるとも思えず、一步を踏み出せずにいた。そんな時期、同じ思いを抱くライターや編集者、書店、古本屋、図書館などで本に関わる知人たちを中心に〈一箱本送り隊〉という活動をはじめた。チラシだろうと家電のマニュアルだろうと、活字を目で追っていればホッとするたぐいの自分たちだが、津波ですべてを失い避難所にいる本好きのみなさんはどうしているのだろう。寒さに震え、堅い板の上に身を横たえながら、どんな思いでこの時間を過ごしているのだろう。そう考えると自分たちがなすべき事はおのずと見えてきた。

「被災地に本を届けよう」しかし必要とされない本は文字通りお荷物なだけだ。であれば被災地の方が「いま読みたい」と思えるニーズに合った本を届けよう。活動の方針はいたってシンプルだった。

2005年に遡る。東京の東側、いわゆる谷根千と呼ばれる谷中・根津・千駄木地区で、一人一箱分の本を持ちより街中に並べて販売する〈一箱古本市〉が始まった。〈送り隊〉呼びかけ人の一人、南陀楼綾繁さんが提唱してはじまったブックイベントだが、2011年にはすでに全国100カ所ほどで開催さ

れていた。〈送り隊〉では、まず日本各地の一箱古本市の主催者たち有志をメーリングリストでつないだ。そして「被災地に本を届ける活動をはじめました。自分が受け取って嬉しいと思える選りすぐりの本を送って下さい」と呼びかけた。谷中の寺院のご厚意で本堂地下をお借りして全国から届く本をジャンルごと著者名ごとに段ボール箱に並べ集積した。一方では被災地の知己を頼りに避難所や仮設住宅から「本のリクエスト」を集め、それに応える本を送った。在庫がない本については全国の有志に呼びかけてさらに集めた。

求められる本は気軽な読みものだけでなく、お礼の手紙を書きたいからと辞典類のリクエストも多かった。今は作れないけれど空想で楽しむの、と料理本、手芸本を求める声も多かった。

2011年には塩竈、2012年には石巻で本のバザーと一箱古本市も開催した。当初無料配布を企画していたものをバザーとしたのは、「本は無料で受け取りたくない。10円でも100円でもお金を払って読みたい」という地元の方の声を聴いたからだ。自分の意志で選び、大切に読む。本に向き合う真摯な思いに、背筋が伸びた。

それから10年、もはや正確な数はたどれないけれど、被災地に届けた本は3万冊近くになるはずだ。

2013年には石巻の中心市街地に〈石巻まちの本棚〉という図書室と古本屋、ギャラリーを兼ねた場所を開設し地元のみなさんと運営している。各種のワークショップや展示企画も充実して、活動は9年目に入ったところだ。●つづく●(たんじ ふみひこ:信陽堂)

# 選書の法則： S. R. ランガナタンからの187のメッセージ (17)

吉植 庄栄

## 17. 第三法則と選書・中

『図書館選書論第2版』の内容を、ランガナタンがよく使った架空の対談方式で紹介する。前回から第三法則に基づく選書論を展開中。

### 【登場人物】

○ランガナタン：図書館界のビッグスター、S. R. ランガナタン (1892-1972) 先生。

○第三法則くん：ランガナタンの著作『図書館学の五法則』に出てくる「いずれの図書にもすべて、その読者を (Every book its reader)」という3番目の法則。原作に倣ってしゃべります！

### ○こうやって可能性を高めて行こう

ランガナタン (以下「ラ」)：さて、今回は図書館の本が利用者に発見される可能性を高めるため、具体的な手法を考えよう。

第三法則くん (以下「三」)：よろしくお願いします。

ラ：特に利用者の関心を引くテクニックについて話して行くよ。

三：はい、どのようなものがあるのでしょうか？

ラ：古い本で一杯の本棚に、その分野の最新の本を入れて行くのだ。

三：なーんだ、普通 (汗)。

ラ：まあ、そう言うでない。利用者はまず新しい本に目が留まり、それを手に取り最終的には借りて家で読む人がそれなりに居るだろう。

三：はい。新しいと色んな意味で目に付きますよね。

ラ：そうだ、それでその本が面白いと感じると、その新しい本を返却後に同分野の古い本を手に取るようになる。

三：たしかに。例えばある作家の小説を読んで面白ければ、本が古くてもその作家の作品を借りる訳ですね。

ラ：その通り。その結果、古い本にも再び脚光を浴びせることができる。これが新しい本の効能だよ。

三：なるほど。新しい本が、利用者に別の古い本を紹介してくれる感じですね。

ラ：そうだ、そしてできれば新しい本には、充実した参考文献リストがついていると良い。

三：そうか、そのリストを基に利用者さんが関連本を探し始める訳ですね。

ラ：そうそう、そのように本と本の関係に注目して選書した結果、「すべての本にその読者を」の達成を促進するのだ。

三：なるほど。では本と本の関係って他にはどのようなものがありますか？

ラ：例えば……「原典とその解説書や研究書」「古典と現代語訳」「外国語の本と翻訳本」「文芸作品とその評論」「理論書とその応用に関する本」「法律書と判例集」といったところだな。

三：へー！ こんなにあるのですか！？

ラ：そうだ。ほかにも学校関連だと「生徒の教科書と先生の指導書」とか。本の世界にも様々な関係性があり、人間と同じで多様なつながりがある。これを意識して選書すると良い仕事ができるぞ。

三：やっぱり、各分野の専門知識と本の形式を知らないとですね。むずかしー！

ラ：うん。あと小技だが、定評ある出版社の大きなシリーズものをセットで選書してみよう。これらは、その道の有識者が各巻をバランス良く編纂しており、関連する本が網羅的に構成されている傾向がある。

三：よく覚えておきます！

### ○やってはいけないいくつかのこと

ラ：今度は逆にやってはいけないことをお話ししよう。

三：はい、つまりそんな選書をするとうち利用者には読めないよ、という話ですね。

ラ：そうだ。まず言語の問題を挙げよう。利用者が読めない言語の本を買ってもしようがない。

三：以前、第二法則くんの時にインドの図書館では受入れる本の言語の問題があるという話がありましたよね。

ラ：日本ではあまり無い問題なのだが、大学図書館ではたまに問題になるぞ。

三：この『図書館選書論 第2版』の原文でも、インドの大学図書館でロシア語の本を大量に買おうとした先生とか、ドイツ語の本を選書した図書館員の

しくじりを紹介していますよね。

ラ：そうなのだ。これって日本の大学でも言えることで、先生が専門研究上良いと思った外国語の本をその大学図書館に選書させても、その先生以外解読不能ということはよくある。研究を主体とした大学ならこれでも良いが、教育中心の大学ではこれは良くない。

三：そうすると「図書はみんなのもの」の精神からもずれてしまいますよね。

ラ：そうだ、ともかくその図書館の利用者の大多数が使えない本は選ばないことだ。利用できないということは、第一法則くんが困るということである。

三：分かりました。言語以外にはどうでしょうか？

ラ：本の中身の主題に着目しよう。主題にはいわば「流行り（はやり）廃り（すたり）」がある。つまり昔なら難解で誰も興味を持たなかったものが、何かの拍子で急に脚光を浴びる、ということはざらにある。

三：先生は、キェルケゴール（注：デンマークの哲学者、Søren Kierkegaard, 1813-1855）を例に挙げていますよね。当時は誰も理解者が居なかったが、現代になって彼の思想が大いに読まれるようになったという話ですよ。

ラ：そうだそうだ。であるので、これであれば必ずOKとかこの類の本は絶対ダメ！という固定観念を持つのも危険だ。図書館員は、それを防ぐために世の中の動向や研究の今を常に知っておくべきである。

三：はい。そういえば筆者さんの今の職場でも最近、ライトノベルの選書について議論が盛んだったようですよ。

ラ：らしいな、筆者さんも悩んだらしいよ。明治時代には小説が格下に見られていたが、現代では積極的に公共図書館に所蔵されている。それから漫画も長く否定的に捉えられてきたが、所蔵館も多くなってきたよね。同じくライトノベルが広く読まれ、それ自体の研究も発展していることを学んだそうだ。であれば利用者にも人気ある媒体だから選書しても良いのではないかと……と考えを改めたようだ。

三：筆者さん、この分野に関して無知だったから反

省しているそうです。

ラ：ライトノベルって表紙が漫画っぽいし、タイトルが奇抜なものもあるので、大学図書館の蔵書に選ぶにはちょっと腰が引けるのも分るがね。

三：でも「子どものために絵本・紙芝居・児童書は図書館にあるよね。そして最近は漫画の選書も増えている。だけど若者が好きなライトノベルが何故駄目なの？」という質問には答えられなかったそうです。

ラ：いい経験だったよね。この場合の教訓は、表紙とタイトルで先入観を持たないことだね。あとライトノベルも毎年非常に多く刊行されるので、中でも基本書であるとかベストセラーのタイトルに絞って選書すべきだね。

三：なるほど、ライトノベルは選書OKでも何を選んで良い訳ではないのですね。できるだけ名作を選書したいですよね。

ラ：そうそう、それは他の文芸作品でも言える。そして表紙やタイトルに騙されない、というのは他分野の本でも同じだよ。

三：どういうことですか？

ラ：タイトルから選書して、到着してから中味が全然違うということは、しばしばある。当初の選書の意図とは離れてしまい、下手をするとその図書館では全く利用者が手に取らない本になってしまいかねない。

三：通販でも配達後封を開けてみると、イメージと全然ちがうー！ というのがよくありますよね。

ラ：よくトラブルになるよね。図書館員としては痛恨だし、第三法則くんとしてはお説教をしたくなるのではなからうか？

三：はい、一体君は何をしていたんだね？選書作業の時にその本のことをしっかり調べなかったの？図書館員の選書の責任について、よく反省して欲しい、と小一時間問い詰めそうです。

ラ：そうだな。というところで、今回は図書館員の選書の責任や義務について考えて行こう。

三：はい！次回で私は最終回なので、一層サービスしちゃいます！

（よしうえ しょうえい：盛岡大学文学部）

# 帰ってきた図書館員 (62)

—好きな作家を一人くらい見つけられたら—

山下 青葉

この原稿を書いている時点ではコロナ禍は拡大するばかり。何とか元気になろうとするものの、自宅と職場の往復のみの毎日では、気持ちを上向きにすることがなかなか難しい状況である。

せめて本の中では旅気分を味わいたいと、近頃は旅行記のようなものを読んでいるのだが、この度読んだ『本の雑誌おじさん三人組が行く!』(本の雑誌編集部編 本の雑誌社 2017) が内容がバラエティに富んでいて面白かった。

この本は、2011年から2017年までの六年間にわたる「本の雑誌」編集長の浜本茂氏、営業担当の杉江由次氏、編集者の宮里潤氏(現在は毎日新聞出版勤務)の「おじさん三人組」による、おもに出版業界にかかわる場所への訪問記録で、訪問先として一番多いのは出版社なわけだが、古書店や書店、校正の専門会社や製本資材の商社などもあり、図書館も神奈川県立川崎図書館、武雄市立図書館、共立女子中学高等学校(東京都千代田区)が入っていた。

神奈川県立川崎図書館は、社史のコレクションで大変有名な図書館で、訪問時が2011年9月だったのでまだ川崎にあった頃の記録となっているが、現在は同じ市内の溝ノ口に移転しており、所蔵冊数も約1万5千冊となっていたが、現在では約2万冊とのことである。私自身、川崎にあった頃の図書館には講演会で一度伺っただけで、社史室には伺ったことがないのだが、ここでおじさん三人組が、トヨタだけで棚二段五十冊以上の社史があるとか、和菓子店の塩瀬が創業六百五十年で社史のタイトルが『まんじゅう屋繁盛記』であるとか、読み物として楽しめたり、装丁が凝っていて感心させられたりと楽しんでいる様子が伝わってきて、改めて行ってみたい気持ちにさせられた。

武雄市立図書館については、改装オープンから一年後に、出版界に身を置く者がいま話題の図書館を知らずしていいものか!という義憤?に駆られての訪問であるが、出張旅費が全員飛行機利用では賄えず、若い頃に高速バス、新幹線、飛行機と振り分けられたところが何とも悲しい。そして予算獲得のた

めではあるが、全く反対のコンセプトを掲げる伊万里市民図書館をセット訪問というのが読む方としては読み応えが増してかえってよかったというところであった。

おじさん三人組は、武雄市立図書館については蔦屋(スタバ)として評価しているという感じで、職員(人)に関する記述が全くなかったのだが、伊万里市民図書館については、たまたま館長と会えて話が聞けたということもあろうが、図書館全体としての評価となっていて、違いはやはり「人(図書館職員)」の存在と思われた。杉江氏が「(市民図書館の「民」が)民間企業の民じゃなくて(文字通り)市民の民なんだ」と言っていたのが印象的であった。

現在、武雄市立図書館についての話題を聞くことは全くないが、伊万里市民図書館については友の会の盛んな活動について聞くことが多いので、さもありなんという気がした。これまたコロナ禍が終息したら行ってみたいと思うところである。

共立女子中学高等学校については、「現代の中高生たちはどんな本を読んでいるのか!」という疑問から、本の雑誌社から徒歩3分の所にあるため選ばれたようである。図書室の蔵書は訪問時の2014年9月時点で約8万冊で、1947年に中学校、翌年に高等学校が設置されている(学校の創立自体は1886年)ためか、良い意味で古い本が揃っているようだ。

中学生向けの読書案内のリストが作成されていて、ちょうど当時あったアンケート調査では、『西の魔女が死んだ』や『星の王子さま』などがおもしろかった本の上位にあがっていたりするのだが、実は本当に人気があるのは小林深雪の作品で、青い鳥文庫は継続購入で全点揃えているとのことだった。対応されていた国語科の先生が「中高生の間に好きな作家を一人くらい見つけられたら、一生の友だちになると思います」と言っていたが、そういうゆるい感じはよいと思った。

まだまだ先の見えない状況が続くようだが、せいぜい読書で夢をはせたいものである。

(やました あおば)

## 「今しかできないことを」 - フランス旅行②

溝上 牧子

連載のように、旅についての2回目を書いている。今回は現地でのことを書こうと思う。

2013年の6月に私たち東京出発組の3人はフランスへ向けて旅立った。この時、唯一旅行代理店で購入したのは航空チケット。これだけはH I Sを利用し購入した。このことが後々救いとなるのだが、旅立つときはまだ、その重要性に気づいていなかった。

夜遅くに日本を出発し、途中乗継ぎを経由し、パリのシャルル・ド・ゴール空港には夕方に着した。空港には友人のFが迎えに来て、彼女の住む寮の最寄り駅まで移動。その近くのホテルにチェックインし翌日に備えた。嬉しいことに、Fは私たちの到着を心から楽しみにしてくれていて、手作りのサンドイッチとワインまで用意してくれた。Fは私たちが前もって行きたいと伝えたジャンルのお店や場所を調べてくれて、ルーブル美術館、大聖堂、絵具屋、文房具屋、古本屋、版画工房、おもちゃ屋、チョコレート専門店、手芸屋等々、縦横無尽に地下鉄と足を使い回ってくれた。昼はカフェでランチをし、夜は、スーパーで買って来たもので夕食を済ませる。町にはおいしいパン屋があちこちにあり、一人一人お気に入りのパン屋があるようだ。道行く人の手提げ袋からはバケツが覗き、齧りながら歩く人もいた。そんな場所なのだ。やはり朝食はおいしいパンに限るだろうと、パンを買って食べた。

行った店の中で、特に印象に残ったのは文房具屋。手紙を書くのが好きな私は便箋コーナーに並ぶ便箋をみてうれしさに胸がいっぱいになった。違う柄、色、紙質の便箋はどれも一枚単位で選び、買うことができる。日本では紙はいたるところにあり、比較的、安価に手に入れることができる。しかし、いくつ行った海外では紙は貴重品とされていることも多かった。こんなふうには、便箋が売られていたら、書き損じたとして、おいそれとゴミ箱に捨てられないだろう。美しく楽しくて、

わくわくする便箋コーナーだった。気に入ったものを何枚か購入すると紙が愛おしく感じられた。他にも小さな行き届いた店がいくつもあり、手芸屋では、毛糸やボタン、布等様々な種類のものが所狭しと店内に並べられていた。赤い大きなボタンと小さなボタンを数個ずつ購入。お店の中に溢れる毛糸の棚がなんともチャーミングだったので写真を撮らせてもらう。その写真はその後のお気に入りの写真として長くスマートフォンの待受画面となった。

言葉ができない=意思の疎通はほぼできない。しかし、見知らぬ人に「おはよう」とか「こんばんは」と声をかけても、ほとんどの人が笑顔で挨拶を返してくれた。移動中の電車でも案外気軽に話しかけられた。ある日は、若い嫁をもらったというおじさんと英単語を駆使して会話したあと「おじょうさんたちに」と大きな板チョコを1枚手渡してきた。ところが…年齢の話に突入したとたん、おじさんと思っていた彼は、私たちより年下だということがわかった。暫くお互い唾然とし、後になって大笑いとなったのだが、ごめんねとチョコレートを返そうとしたが、一度あげたもの!と最後まで受け取らなかったの、そのチョコレートは旅の間に私たちのお腹の中へと消えた。フランス語も英語もできない4人。しかし今、会話の内容を鮮明に思い出すのはなぜだろう?もしかしたら私たちがそう思っていた通りの会話じゃなかったかもしれない。しかしあの時の楽しい交流は間違いなく存在した。南西部でお世話になったタクシーの運転手さんも然りだ。どうしても何時の電車に乗りたいと懇願すると猛スピードで駅に向かってくれた。友人のJはその時、スピードで車内で身が2つ分かれるのではないかと思ったと言う。その甲斐あって電車の時間に少しの余裕を残して駅に到着した。伝えようという気持ちと、理解しようという気持ちで言葉を超える何かが生まれるのかもしれない。(みぞかみ まきこ:朔北社)



## 図書館を離れて (第54回)

— 時代小説の中のお仕事女子② —

並木 せつ子

時代小説と言っても範囲は広いが、ここで取り上げる作品は“江戸時代×実在しない主人公×仕事を持つ女”に限定した。また“お勧め本”という観点から選んだわけではないこともお断りしておきたい。

さて、江戸時代にはどのような女の仕事があったのだろうか。就業記録は無いが、残されたさまざまな資料から推察すると、多くは何らかの仕事に就いていたようだ。そして江戸の町家の女の仕事で一番多かったのは、今のパートやアルバイトにあたる賃仕事や日雇いだという。当時は大半が16歳くらいで専業主婦になったので、空いた時間を活用して仕事をする人が多かったのだろう。賃仕事は洗濯や着物の仕立てなど。日雇いは子守、祝言や葬式の手伝い、病人の世話など。他に物売り(小間物、線香、枝豆、附け木、飴、花、糊など)もあった。賃仕事に次いで多いのが住み込みの女中奉公で、師匠(手習い、三味線、琴、踊りなど)や髪結とともに、当時の女の自活手段の一つであった。

最初の「お仕事女子」は手習い師匠である。これは髪結と並んで、江戸という都市ならではの仕事であった。文化文政(1804～30)期、江戸市中には900か所以上の手習い指南所(寺子屋)があり、明治初年度の調査によれば手習い指南所経営者の20%は女だったという。江戸の女兒就学率が高かったこととも関係しているのだろう。手習い指南所は数え7歳頃に入門し約3年学ぶ。授業時間は午前8時～午後2時頃、昼食は家に帰る。休日は毎月5・15・25日に盆・年末年始・節句などだった。これから見ていく女師匠たちは、未婚か、離縁や死別で今は独り身という境遇。武家の出が多いのも特徴の一つである。

『銀杏(ぎんなん)手ならい』(西條奈加著 2017年)の主人公、萌は24歳。赤子の時大銀杏の木の下に捨てられていたのを、手習い指南所・銀杏堂を運営する父・嶋村承仙と母・美津が育ててくれた。御家人の家に嫁いだ萌だが、3年で離縁されたため、隠居した承仙に代わり師匠となった。やんちゃで手

を焼く子もいれば、親が死んで稼ぎ手になるため手習い所をやめる子もいる。14人の子どもを相手に、萌はいつも一生懸命だ。その上、門前に捨てられていた赤子の母にもなる……。

『心(こ)花堂(はなどう)手習ごよみ』(三國青葉著 2018年)の匂坂初瀬は30歳。両親は亡くなり兄弟もいない。18歳から旗本の屋敷で祐筆をつとめていたが、女筆指南・心花堂の師匠だった伯母が病に倒れたため跡を継ぐことになった。祐筆は文書担当のようなもの、女筆指南は女子用書道を教える所である。師匠が初瀬に変わると筆子たちは次々と辞めていった。教えることの難しさを思い知るが、個々の事情を抱えた筆子たちに誠実に対するうちに信頼を得ていく。初瀬の発案したディベートのような「話し合い」の時間や、「あ、やった！ って、思っちゃった」「だよねえ、あ、そっか」のような会話は、時代小説を読んでいるのを忘れてしまいそう。

『お師匠さま、整いました!』(泉ゆたか著 2017年)の桃は24歳。8年前、算術家で寺子屋の師匠でもあった上野清道のもとに嫁いできたが、昨年夫は亡くなった。後を継いで師匠となったものの、もともと学問を面倒で苦しいものと思っていた桃は乗り気ではない。筆子の中に、商家の娘で算術が得意な鈴、「学問を学びたい」と15歳で入門した春がいた。競いながら力をつけていく鈴と春。教えることに迷いのあった桃も自ら学び、筆子の成長に手応えを感じるようになる。「お師匠さま、整いました」は、鈴が鴉(からす)算を解いた時に発した言葉である。

『墨の香』(梶よう子著 2017年)の雪江は26歳。嫁ぎ先を1か月前に離縁され実家に戻った。実家の岡島家は奥祐筆という家柄で弟が跡目をついでいる。雪江は実家で筆法指南所を開いた。まず漢字の意味や成り立ちから学ばせようとするが、弟子の武家娘たちは一筋縄ではいかない。「女子は女文字さえ書ければいい」と言われていた時代に、「漢字は男子、仮名は女子と分ける必要ない」と考え

る雪江への風当たりも強い。そうした中で、弟子たちを導きながら自らも成長していく。最後は元夫と復縁するが、書の師匠という自らの意思で選んだ職を手放すことはない。

『恋風』（『恋忘れ草』所収 北原亜以子著 1993年）の萩乃は27歳。父・山中帯刀を手伝って手習い師匠をしてきた。22歳の時に父が亡くなると、女師匠というだけで弟子の数は激減する。だが、萩乃のもとで学んだ子は奉公して役に立つと評判になり、3年後には回復した。萩乃はこの仕事を一生続けるつもりで縁談も断ってきたが、相談する相手がないのは心細い。実は死んだ父には秘密があった。萩乃はそれに怯えていたのである。そこへ傘問屋の手代・栄次郎が弟子入りを希望し

てきた。余韻を残して終わる短編。

手習い以外に三味線、踊り、琴など遊芸の師匠がいる。三味線を教えて自活する女というのは、主人公でなくても、時代小説にはよくある人物設定である。中で異彩を放つのが『江戸の闇風』（山本巧次著 2018年～）だ。主人公のお沙夜は「浮世絵の美人絵から出てきたかの如き女」である。表の仕事は文字菊という名の常磐津師匠。裏の仕事は“法で裁けない外道をやっつける”大泥棒。仲間の彦次郎、鏑木左内とともに、三味線に仕込んだ長ドスで大活躍。どうやら松平定信とも知り合いらしい。「必殺シリーズ」のような展開なので、「お仕事女子」らしさには期待しないほうがいいかもしれない。

（なみき せつこ）